

バードの旅行記を「完訳」

金坂清則・京大名譽教授 足跡たどり詳細な訳注

明治期資料と照合、伊勢や奈良も収録

明治初期の1878年に日本各地を旅した英国人旅行家、イザベラ・バード(1831~1904年)。7カ月間の旅行記の全訳「完訳 日本奥地紀行」(全4巻・平凡社)の「写真」が完結した。地理学者の金坂清則・京大名譽教授が20年にわたって、バードの足跡を訪ねた成果が詳細な訳注に凝縮されている。

「完訳」はバードの帰国2年後にロンドンの出版社から発売された全2巻の原著を底本としている。金坂さんは原著に基づいてバードの旅の舞台へ足を運び、当時の地元紙や郷土資料を調べること、人々の生活ぶりやその年の天候などの記録とバードの記述に食い違いがないかを丹念に照合しながら訳した。

「完訳」4巻に収録の「伊勢神宮に関する覚書」で、バードは「外宮の神域の中核をなす飾り気のない木造の建物

梨健吉訳で刊行され、広く知られた。金坂さんは高梨訳の意義を認めた上で「この訳は簡略本を翻訳したもの。関西と伊勢方面の旅が完全に省かれていることなどにより、バードの旅の本質が分からなくなっている」と指摘する。

日本でのキリスト教伝道の実態に強い関心を持っていたバードは同志社英学校創始者で宣教師の新島襄と会ったり、キリスト教系の学校や教会を訪ね、伊勢に赴いたのも日本人の信仰への関心からだったことがうかがわれる。



(正殿)の中で見た箱や鏡について克明に描写している。この記述について、金坂さんは神宮司庁編の「神宮史年表」や英の外交官、アーネスト・サトウの論文などから、この時期の外国人参拝の状況なども訳注に盛り込んだ。「古き日本を知ろうとしたバードの旅を知るには伊勢や奈良についての記述も欠かすことはできない」と強調する。

【手塚さや香】